

者もそれを追体験することで、より増幅された世界をくみとる必要がある。

「徒然草」の説話的、体験的、物語的な章段における、具体的な名を記された草木には、単に偶然の存在物として登場しているだけでなく、ある種の意味を付与されているケースが他にもある。これは草木に限ったことでなく、固有名詞（人名・書名・地名など）にはその傾向が認められるが、これは別稿に譲りたい。従前から随筆という規定を受けてきた「徒然草」ではあるが、その表現には、まるで韻文の構造にみられるような、巧緻な工夫がある。この線で読み味ってゆくことは、要するに「徒然草」をどのように掌握するかもかわり重要な意味をもつであろう。

既述のように前編と後編とは、同じく「徒然草」の草木を論じてはいるが、前編が兼好の趣味や思想と関連するのに対し、後編は、各段の構想や虚構性とかかわり、次元を異にする考察となっている。

ここで前編、後編を草木という同じ論題の糸でくくる共通項を求めるとすれば、それは兼好が草木を掌握する態度である。兼好が家にありたき木として列挙する草木とその状況把握には、彼の裸眼の観察より、常に従前の和歌や物語世界で情緒化された伝統が作用していたが、後篇で論じた草木の意味付与の背後にも同じ作用が働いている。ここに「徒然草」の内実をみすえてゆく、共通項を認めうる。

注1 「国語と国文学」（昭51・6）。

2 「徒然草」の本文は、日本古典文学大系本による（慶長十八年刊古活字版）。

3 「徒然草通釈」。

4 「徒然草全注釈」（上巻）。

5 「あはれたる草のいほりのさびしさは風より、はかに、とふ人ぞ、なき」（山家集）はか。

6 【中世の隠者文学】（シンポジウム日本文学⑥）での発言。

7 注6に同じ。

8 「隠遁の文学」。

9 新潮日本古典集成「方丈記・発心集」（三木紀人校注）。

10 日本思想大系本の書き下し文による。

11 「国文学註釈全書」による。

12 注4に同じ。

13 「徒然草の考察―諸縁放下と才芸尊重―」（中世文学第21号）。

14 橋純一氏「徒然草新講」。

15 注1の拙稿。

16 「国文学註釈全書」による。

17 「枕草子」は、古典文学大系本による。

18 「徒然草諸注集成」の引用による。

19 「兼好と名子―徒然草と竹むきが記―」（私家版）。

20 「徒然草の執筆年代について」（国語と国文学昭48・2）など。

21 「徒然草」の「によび臥す」（国文学放昭33・3）。

22 岩波文庫本による。

23 沼波瑠音氏「徒然草講話」。

24 注1に同じ。

（昭和52年4月15日受理）

せる。

拙稿ではこの段も、これに類した兼好の実体験があり、それを第三者のこととして、さまざまな虚構を加えてしまったものとみた。そこには「源氏物語」の花散里、東屋、浮舟などの場面が重層されて虚構化が行われている。桂が登場するのは、その末尾で男が女と別れてゆく場面である。

立ち出で給ふに、梢も庭もめづらしく青み渡りたる卯月ばかりの曙、艶にをかしかりしを思し出でて、桂の木の大きなるが隠るゝまで、今も見送り給ふとぞ。

ここで桂の木は、女の館の目印であり、あの夜の懐かしい逢瀬を思いおこさせる契機となっている。

桂の木は、カツラ科の落葉大高木で、高さが二五〇三〇米に達するので、目印にふさわしい木である。花は四、五月頃、葉に先立って咲く。

「月の桂」を除いた、いわゆる桂の木は、八代集ではほとんど取材されていないので、和歌の方面の伝統的な情緒は付与されていない。ここは諸注釈書の指摘の通り、「源氏物語」で源氏が中川のほどをよぎったとき、琴の音に耳をとめ、

門ぢかなる所なれば、少しし出でて見れ給へれば、大きな桂の木の追風に、祭の頃おほし出でられて、そこはかとなく、けはひをかしきを、「たゞ一目見給ひし宿りなり」と見給ふ。(花散里)

を念頭において執筆していることは確実である。この場面は中世の歌人・連歌師にとっても、印象深いところで「連珠合璧集」でも「桂トアラバ：…おいかけ」と寄合にしており、「夫木抄」菟集の桂の木の歌にも、ここを念頭において詠じた歌が数首みえることなどでそれが察せられる。「花散里」の桂の木は、回想に身をゆだねる契機となっているが、かかる意味をもつ桂の木は、同じ「源氏物語」の「乙女」の巻の冒頭でも、

年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば、世の中、色あらたまりて、衣がへのほどなども、今めかしきを、まして祭の頃は、おほかたの空の気色、心地よげなるに、前斎院は、つれづれとながめ給ふ。お前なる桂の下風、なつかしきにつけて

も、わかき人／＼は、思ひ出づることゝもあるに…

と、賀茂祭を思い出させている。桂の木を見て賀茂祭を懐かしむのは、四月の酉の日に行われる祭には、葉のついた桂の小枝と葵とを冠や着物に飾りつけるためである。→四段で季節を「卯月ばかりの曙」に設定しているのは、この桂の木―賀茂祭―四月の響きあいもこめているのだろう。

一三九段で兼好は、「家にありたき木は……たち花・かつら・いづれも木はものふり、大きなよし」とする、大きな桂への嗜好がこの一〇四段の桂とも重なる。

なお「桂の木の大きなが隠るゝまで今も見送り給ふとぞ」の表現は「大鏡」で菅公が流滴の際に詠じた、

きみがすむやどのこずゑをゆく／＼とかくるゝまでもかへりみしはや

の歌（拾遺集）巻六にも入集。「源氏物語」の真木柱でも引歌となっている）をアレンジして、物語を背景に情緒的気分の増幅重層化を試みている。かかる執筆手法を駆使した章段は、他にも幾段がある。

おわりに

「徒然草」で具体的な名をもって登場している草木のうち、柑子・棟・梔子・桂の四つの木に焦点をしぼり、各々が各章段の構想のなかで、ある種の意味をもって設定されているのではないかとの試見を述べてきた。

この四つの木の意味は、柑子や桂のように先行する著名な説話や物語の場面を念頭において執筆されているとおぼしいものがある。これは当然、読者側にもその場面を重ねあわせて読むことを期待しているわけで、先行作品の情緒的な雰囲気や重層化となり、また執筆方向や主題ともからまってくる。

一方、梔子や棟の木などは、特定の場面を背景にして設定されてはいないが、各々の木が、和歌や物語の世界でどのように読みこまれてきたかという、伝統的なとらえかたを念頭において設定された可能性があり、享受

にきかされていたとみる。「によひ」に関しては、すでに森田武氏に「によひ」でなく「によひ」であるとすると卓論もあるが、意味するところはどうやら、瀕死の状態になって「うめく」「うなる」ことらしい。即ち、自分の意志を口に出して言ったり、叫んだり、また、相手の呼びかけにも答えられなくなって、うめいているさまである。その状態は「口無し」になったさまともいえる。「くちなし原にによひ伏したる」に筆者がこめた表現意図は、太刀で「ひた斬りに斬り落」され、血だるまになって梶子の茂る原に、まるで口もきけぬ状態になって、うなっている具覚房を描き、そこに皮肉な滑稽味を表出することにあつたのではなからうか。これは、あまりに穿ちすぎた読みであらうか。この表現をこのように読む享受者はいなかったのか、いまだ同意見の書をみない。ただ、「京師巡覧集」(延宝七年刊)の編者僧丈愚は、木幡を紹介した箇所で「或ハ宇治ニスミケルオノコ。ウツシ心ナク酔テ太刀ヌケル處コノアタリニヤト人ニ問ヘドモクチナシ原。タレ答ベクモアラズ……」と八七段の事件場をさがし「クチナシ原」に「口無し」をきかせているのが気になる。但し、ここにも知家の歌が背後にあるわけで、「徒然草」の表現を私のように読んでいたかどうかは疑問である。

八七段を読むと、兼好も披見したとおぼしき「十訓抄」^{注22}の説話を思いおこす。これは河内国金剛寺の僧が、仙人になろうと松の葉を食べ、やがて身軽くなったと自己暗示にかかり、岩上から飛びおりて失敗、谷に落ちた話である。そのとき「我身も散く」に打損じて唯死に、死ぬれば、弟子・眷屬さわぎよりて、いかにと問へど、いらへもせず。僅に息のかよふ計なりけれど、とかうして坊へかき入つ。……命計は活れども、足手腰も打折て、起居も得せず……と僧を描く。八七段では、息のかよふほどになっている具覚房を、人々が「求め出でて昇きもて」きているが、最後は「辛き命生きたれど、腰斬り損ぜられて、かたはに成りにけり」と結

ぶ。両書の事件描写はよく似ている。しかも「十訓抄」では「いかにと問へど、いらへもせず」と僧は「口無し」の状態になっている。この「十訓抄」の印象深い説話が、八七段の描写になんらかの影をおとしているとまではいいきれないが、参考までに触れておく。

「くちなし原にによひ伏したる」を、梶子の生えている原で、まるで口もきけない状態になってうめいてたおれているとみるのは、八七段の描写の方向と当然かわってくる。

この段は、具覚房にとつては悲劇である。道中の長きをいたわる気持から口取り男に勧めた酒であつた。その善意が皮肉にも、片端になる惨劇をまねく。まさしく内容的には悲劇であるが、この章段の享受者は、その悲劇性を痛感する前に、むしろ皮肉なおかしみを感じるのが一般である。兼好の筆は、最初から、具覚房に同情をよせて描いてはいない。「さて『山だちあり』とのしりければ、里人おこりて出であへば、『我こそ山だちよ』と言ひて……」にいたり、おかしみは頂点に達する。その滑稽さは男の態度描写だけでなく、具覚房をも、やや戯画化している。最後の「辛き命生きたれど……」の結末の筆づかいや、奈良法師に「手を摺りて」許しを願う姿にもそれは伺え、私の読みの「くちなし原にによひ伏したる」にかかわってくる。「くちなし原」の意図を、単に「倒れてる背景が見えて、こゝにも技巧の妙がある」という叙景の鮮明化だけでなく、「口無し」をきかせていただろうとする私の読みは、八七段のこのような構想や筆づかいと関連して意味をもつ。

四

一〇四段の「桂の木」の設定の意図に関しては、すでに諸注に指摘があり、拙稿^{注24}でも触れたので、ここでは追補事項を加えて、ごく簡単に扱う。一〇四段は、「或人」が籠居している女を訪れ、一夜こまやかに語らい、明け方に帰ってゆくまでの経過を描いたもので、王朝物語の一齣を想起さ

山しなのことはたの里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば（雑恋・二四三）の歌から、「馬」とか「かち人」を連想した。この歌は「万葉集」（巻十一・二四二五）の伝承歌であり、「古今六帖」にも異文をもって収録されて広く流布していた。「連珠合璧集」に「馬トアラバ……木幡のさと」「かち人トアラバ……木わたのさと」と寄合となっているのも、この歌を出所とする。

あとひとつは、霧深く、けわしく恐ろしい山というイメージであり、「源氏物語」などでも、大へんに恐ろしい所とする。

八七段には馬は登場しているが、人麿の歌の世界との重層はなく、あるとすれば残虐な惨事がおこったことで、恐ろしい場所としてのイメージであらう。

他方、「くちなし（梔子）」は、アカネ科の常緑低木で、六〇七月頃、枝先に一個ずつ白色の花を開き芳香がある。黄色染料にも用い、漢方では不眠症、止血に使い、民間では粉末にして小麦粉を加えて水でこね、打ち身の薬にするという。歌材としては「万葉集」に一首もなく、「古今集」で二首登場する。

山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして

（素性法師・雑体・一〇二二）
みくちなしの山のくちなし、えてし哉おもひのしたぞめにせん

二首ともに「梔子」に「口無し」をきかせて洒落をとばす。この二首によって「梔子」といえば「口無し」を即座に連想させることとなり、以後の勅撰集では「後撰集」（二二七）、「拾遺集」（二五八）「後拾遺集」（二〇九四）、「金葉集」（二七九）、「千載集」（二一五・五四八）などに散見されるが、「千載集」の一首を除き、他はすべて「口無し」と関連して「いはぬ」「かたるな」などといった措辞をとまなう。勿論、先に引いた「新撰六帖」の

こはた山あるはさながらくちなしの宿かるとも答へやはせん、
の歌も、木幡山に生えているのは皆、梔子の木、即ち口無しだから、一夜の宿を尋ねても答えてもくれないと洒落ている。

ところで作者の知家は木幡山の実体を熟知していて「あるはさながらくちなしの」と詠じたのであろうか。「徒然草」の諸注釈書がこぞって「木幡付近には、くちなしが多く生えていた」と断定する根拠を、この歌だけにもとめているとすれば、もっと、慎重をきす必要がある。

知家の歌の発想に関連しているのではないかと思う歌として、私は「千載集」の俊頼の

劉萱

我駒をしはしと驅るか山城の木幡の里にありと答へよ

（雑体・二一七〇）

を指摘したい。知家が「新撰六帖」で「くちなし」の歌題に接したとき、当然「口無し」の発想で詠出せんとしただろうが、その際、「木幡里」と結合させたのは、この山には梔子が多いということを知っていたからか、あるいは、先の俊頼の木幡の里を詠じた末句の「ありと答へよ」に着目し、「口無し」→「答へやはせん」→「木幡の里」、と問答したかであろう。この後者の俊頼の歌との問答説の当否はさておき、他の証拠文献による判断ならともかく、知家の歌だけで木幡山が梔子の木でおおわれていたと断定するには慎重でなければならぬ。「徒然草」の「くちなし原」も、当時の歌人・連歌師の座右の書であった「新撰六帖」の知家の歌から、木幡山と梔子の結びつきを認識していたふしもあり単純にこれをもって木幡に梔子が多い証拠とはなりえない（最も、本州の中部以南の山地には、いたるところに梔子が自生しているので、木幡山にも生えていた可能性は強いが）。このようにたどてくると、兼好がわざわざ「くちなし原ににひ伏したる」と木名を持ち込んだのは、偶然以上のなにかの意図があったとの見方もできる。結論を言えば、この「くちなし原」には、梔子の木が茂った原というほかに、梔子から歌人たちがすぐに連想する「口無し」が背後

「いとあやしきこと」を、八七段の事件と関連付け、「兼好が、名子の初瀬詣でに同行しての帰途、宇治にさしかかった時遭遇した事件の一部始終を、あとで聞き知って書きつけたものに相違ない、と思われる。」との説をだされた。

この説は奔放な推測を働かせた、魅力ある想定ではあるが、八七段の事件を貞和三年の事件とみるには、まだ「徒然草」の執筆年時の再検討を必要とするし（宮内氏は貞和年間までひきざげられているのか）^{注20}「竹むきが記」の本文の解説、兼好が名子に随行していたかどうかの確認など、なお不安な面もあり、今後、慎重なつめが必要であるので、ここでは紹介するにとどめたい。

ただ、八七段は先述したように、古い説話を再録したという感じはなく、当時の事件を誰かから聞き知って、まとめたものとみてよからう。が、兼好自身はその事件の渦中であって実際に見たのではないので、八七段の、男や具覚房の会話や動きの描写には、兼好の想像をまじえた虚構も相当に介入しているとみてまちがいない。このことを念頭において読み味う必要がある。

ここで特に問題としたいのは「具覚房は、くちなし原にひひ伏たるを」の「くちなし（梶子）原」のもつ意味である。これまでの諸注釈書の説を整理すると、「くちなし原」とは、(1)くちなしの多く生えている原、の意で地名ではない。木幡付近には、くちなしが多かった。(2)木幡付近にくちなしの木が多く生えていたところから、固有名詞のように言い馴らされた。(3)地名と思われる、この三説になる。言われるまでもなく「くちなし原」という記しかたは、地名といった感じもあるが、木幡付近には、他の文献をみてもそういった地名はないし、後述するように、木幡とくちなしの結びつきからみても、(1)の「くちなしの多く生えている原」というのが妥当ではなからうか。

この段でも、「原」「野原」でもよいのに、わざわざ「くちなし」と具体

的な木名を記しているのが気になっていた。特に「にひひ伏す」とともに登場しているのをみても、筆者の意図があるような気がする。

諸々の地誌類や文学関係の文献に当たって見たが、諸釈書がいうような、「当時、木幡付近にはくちなしが多かった」という根拠を遂にみいだせなかった。兼好は木幡を実際に旅して、そこに「くちなし」の多く生えているのを熟知していたのであるうか、それとも人からの伝聞による知識か、そのあたりになると、もはやきめ手がない。ただ、実際はどうであったにしろ、木幡とくちなしを結びつけて登場させた背後には、やはり和歌によまれた背景があったのではなからうか。「徒然草寿命院抄」以来、諸注釈書では「新撰六帖」の、知家の、

くちなし

こはた山あるはさながらくちなしの宿かるとても答へやはせん

を「くちなし原」の参考歌に引く。これは、兼好がこの歌を念頭において、この一文を記したという意味合いで指摘したのではなく、木幡山に梶子の多いという根拠に引用したままであろうが、私には、この歌はかなり重要な問題を提起しているように思われる。（因に、この歌は「夫木抄」にも引かれ、作者を信実とする。）

「徒然草諺解」などという「くちなし原、名所にあらず木幡の邊に梶原多し」という主旨のことを多くの注釈書が断定するが、不思議なことに、兼好以前には、木幡と梶子が結合した歌や木幡山の描写は、この知家の歌以外にみいだされない。（兼好以後でも、わずかに「しばしまてこはたの山のほととぎすこゑ此ころや口なしの花」（草根集・巻四・二二六八）だけみいだしているが、これも「新撰六帖」の影響下にあるだろう。）

当時の歌人・連歌師にとって、「木幡山」といえば、何が想起され、どんな場所として印象付けられていただろうか。歌枕というほどの著名な地名ではないが、およそ二つの方面が思いおこされたのではないか。そのひとつは、「拾遺集」柿本人麿の、

の木は存在は事実そのままであったかもしれないし、必ずしも五月五日でなく他の日、棟の木でなく他の木であったかもしれないのである。このあたりは虚構性と関連してくる問題である。

因に、当時、賀茂の辺に棟の木はあったようで、延慶三年（一二二〇）五月十日になる「駿牛絵詞」には「堤に（賀茂川）あふち六七本並み立ちたる下に、牛を設けてかけ替へんとす」とみえる。また、中世では賀茂と棟の木の結合は周知のことだったようで、「新撰六帖」（「夫木抄」にも引く）に、信実の歌として、

道のべのかもの河原のふしおがみ古木のあふち、かげもなれにき

がみえる。この歌は「連珠合璧集」の「楊トアラバ……賀茂河原」の寄合の出典歌とおもわれ、中世の歌人・連歌師にもよく知られていた歌である。契沖なども、先述の「鉄槌」板本の四一段の書き込みで、この歌を記している。異文もあって「道のべの」の歌の意は明瞭でない点もあるが、「夫木抄」の「ふしたかみ」より、「ふしおがみ」の方が妥当な本文ではなからうか。「ふしおがみ」は神社で参拝者が平伏して拝むために木を横たえた場所であろうが、平伏して拝む意をきかせる。四一段の男が、棟の木で居眠りして、頭をこっくりこっくりしている姿は、まさしく「ふしおがみ」の状態であるが、兼好はこの歌を背景にして、そこまでのユーモアを企図してはいなかったろうが、ともかく、この歌も賀茂と棟の下の響きあいを示すものではある。

以上、四一段の棟の木の構成上の設定意図について縷述してきたが、棟の木は偶然の事実をそのまま無意識的に記しとどめたというより、冒頭の五月五日と響きあい、「枕草子」の言のごとく、この日に美しい淡紫色の花を開いた棟の花をも同時にイメージさせる意図があったのではないか。さらにいえば、「新撰六帖」などの歌にも例があるように、賀茂神社と棟の木の結びつきを背景にして、より具体的な叙景を浮びあがらせる働きをも付与されていたかもしれない。

三

次には八七段の「くちなし（梔子）」にうつる。八七段は「下部に酒飲まする事は、心すべきことなり」という、いささか教訓めいた一文を冒頭に記す章段であるが、内容的には人間の動きが生き生きとタッチされ、事件描写としても、すぐれた段である。

ある時、宇治に住む男が、妻の兄弟である具覚房を迎えに馬を京までつかはす。具覚房は馬の口取り男に酒をふるまう。男は「さしうけく、よくと飲」んだ。やがて木幡のあたりに来たとき、警備の武士をつれた奈良法師にゆきあう。口取り男は酔にまかせて太刀をぬき、喧嘩を吹きかける。武士達も矢をつがえたので、具覚房は手をすって許しを願う。武士どもは嘲笑しながら通り過ぎた。その後、

このをとこ具覚房に逢ひて、「御房は口惜しき事し給ひつるものかな。己れ酔ひたる事侍らず。高名仕らんとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつること」と怒りて、ひた斬りに斬り落しつ。さて、「山だちあり」とのしりければ、里人おこりて出であへば、「我こそ山だちよ」と言ひて、走りかゝりつつ斬り廻りけるを、あまたして手負はせ、打ち伏せて縛りけり。馬は血つきて、宇治大路の家に走り入りたり。浅ましくて、をのこともあまた走らかしたれば、具覚房は、くちなし原ににひ伏したるを、求め出でて昇きもて來つ。

辛き命生きたれど、腰斬り損ぜられて、かたはに成りにけり。

この話は、恐らく当時の突発事故を聞き書きしたものであるうが、どの注釈書にも、いつごろの、どんな事実を背景にしたものであるかの探索はなされていなかった。近年、宮内三三郎氏は、「竹むきが記」に、名子が貞和三年正月末に、初瀬参詣を行い、その帰途、奈良に一泊して翌日（二月三日）出発したが「宇治のわたり、いとあやしき事なんありとて、その夜はにはかにしゆせん僧正が坊」に泊ったこと、その翌日は「木幡山越え猶怖畏あるべし」ということで、別路をとって帰京した記事があるが、この

ここで問題としたい棟の木は前半に登場するが、念のため、その部分だけ引用しておく。

五月五日、賀茂の競べ馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔てて見えざりしかば、おのゝ下りて、埒のきはに寄りたれど、ことに人多く立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなる棟の木に、法師の、登りて木の股につゐて物見る、あり。とりつきながら、いたう睡りて、落ちぬべき時に目を醒ます事、度々なり。

この段に関しても、話がうまくできすぎており、虚構に近いとみる学者がいる一方、安良岡氏のように、諸史料より、当時は賀茂の競馬は必ずしも五月五日に興行されてなく、五月一日に行われるのを通例とすること、兼好生存中、五月五日に行われたのは、永仁三年なので、この時の逸話かと、伝記とからめて考証され、十三歳の少年から思いもかけない一言を聞かされた人々の態度に着目される。^{注12}しかし、最近、斎藤彰氏は「実躬卿記」を再点検され、五月一日に行うのは「御馬馳」であって、「競馬」は当時も五月五日に行うのを例としていたと反論されたが、私は、作者の体験の叙述スタイルをとる章段を、そのまま伝記的な事実と短絡させる方法は、あまりにも素朴であり、慎重な態度で対処すべきだと思う。

この四一段でも、これに類似の体験はあったろうが、「人生は木の股に腰かけていねむりをしているようなものだ」という比喻になりそうな事柄^{注14}を軸にして、当日の状況や群衆の態度などの叙述面に、種々な虚構も加えられ、ドラマチックに構成されていると予測される。その一つが棟の木の設定である。すでに拙稿で一言触れたように、この段を読むたびに「棟の木」とわざわざ具体的な木名を記しているのが妙に気になっていた。「向ひの木」で充分なのに、しいて「棟の木」としたのは、単に偶然の事実をそのまま無意識裡に記したまでなのか、他に何かの意図があったのか、問題にしてよかるう。「徒然草諸抄大成」は「山案一説に爰にむか

ひなるあふちの木といへるは樗木の事には非ず、あふちとは大路のこと也」という奇妙な説を紹介しているが、かかる読みをするのも、先の私の提起した疑問の発端と一脈かよう享受者心理のあらわれと受けとれ、興味深い(勿論、こゝは「大路」でなく「棟」が妥当)。

棟は樗とも書き、俗に栴檀と称する落葉高木で、五、六月頃に淡紫色の花を開く。和歌の世界では「万葉」に、憶良の著名な歌「妹が見し棟の花は散りぬべし」(巻五・七九八)ほか二首に取材されているが、八代集では「新古今集」の

あふち、さく外面の木陰露落ちて五月雨はるゝ風渡るなり

(前大納言忠良・夏・二三四)

五月ばかりに、雲林院の菩提講にまうでてよみ侍りける

むらさきの雲の林をみわたせば法にあふちの花咲きにけり

(肥後・釈教・一九三〇)

の二首だけで、あまり取材されなかった。この二首でも、ともに五月という月と関連していること、特に後者は棟の淡紫色の花を、阿弥陀来迎の時の紫雲とからませているなど、留意すべきであろう。

兼好が四一段の「棟の木」にこめた意図は、「枕草子」(三五段)の「木の花は」の「木のさま、にくげなれど、棟の花、いとをかし。かれがれにさまことに咲きて、かならず五月五日にあふちをかし」を想起したとき、彼の執筆心理に触れえたように思った。四一段でも冒頭の「五月五日、賀茂の競べ馬を見侍りしに」の月日と棟の木は、伝統的な結びつきをもち、互に響きあうように設定されているのではなからうか。「枕草子」の感想は「あふち」の花が必ず五月五日に咲き「あふち」のを、花名の「あふち」とかけて洒落てもいるが、「拾芥抄」などによると、五月五日に棟の木の葉をとって悪気を避ける風習もあり、その点でも棟の木と五月五日は伝統的な関連をもっていた。

このようにたどってくると、四一段の実体験は五月五日という月日と棟

ありけるとなん

と、果実を惜しんだ唐国の人物を列挙した後に、康仙説話を記す。さらに最近完結をみた『契沖全集』（第十六巻）所収の、彰考館蔵板本「鉄槌」に「此木なからましかは」のところに「元亨釈書、六波羅密寺僧講仙、死蛇ト成テ、橘樹ニマトヘルコト」と契沖の書き込みがある。「野槌」の著者林道春や契沖が、どのような意図で、この説話を指摘したかは必ずしも明瞭ではないが、彼等が一段から康仙説話を想起したことだけは確かであり、私以外にも、そういった享受者のいたことは、先の試見を側面から支えるものとして心強い。

兼好の意図はさておき、少なくとも一段から康仙説話を想起する享受者は、他にも相当数いたのではなからうか。この意味で、一段の遁世者と柑子の実の結合が改めて留意される。現代の注釈書は「野槌」のごとき指摘なんの意味もみいださず、これを無視してきたのである。

さて、一段は「少しことさめて、この木なからましかはと覚えしか」の最後の一文の、「ことさめ」た原因や「ましかは」にこめられている気持をめぐり、諸説がある。

「ことさめ」た原因には、庵主の、物欲を超越していないあさましさが考えられるが、また一方では、厳しいかこい、に不調和を感じたともとれる。「この木なからましかは」のあとも、「よからまし」が省略されているとの見方が一般だが、その「よからまし」の内実はなにで、誰にとってよいというのか、必ずしも明瞭でない。「この木」と言って「このかき」と言っていないし、全く「ことさめて」と言わず「少し」と言っているあたり、興醒めの原因や感情は、筆者にとって相当に複雑であったとみるべきであろう。

そのような筆者の複雑な思いを、先の康仙説話を重層させて読む享受者は、柑子の実を愛護した執心を、この段の主題としてつかむであろう。それもまた、ひとつの読み方である。

康仙という人物は、法華經の熱烈な説師で清貧の生活を送った人で、生前に橘の実に執心した以外に罪障はなく、最後には往生をとげている。兼好が、この一段を執筆したとき、遁世者と柑子の実の結合関係から、康仙説話を想起した可能性はあるだろうし、もっと臆測すれば、意図的にこの説話を背後に重層させていたかもしれない。ただ、その場合でも、康仙説話の中心テーマである、執心と往生の問題には、それほど比重をかけず、遁世生活と執心の問題に限っていたのではなからうか。「少しことさめて」と、幻滅しつつも庵主への非難に強く向っていないこと、「このかき」といわず「この木」にあくまで焦点をしばっているのなども、もし、この柑子の木がなければ物欲や執着心を起さずにすんだのという気持ちもこめられているように思う。

このようにみると、一段は、筆者兼好が実見した閑居の遁世者を見る目、康仙を見る目、そして自己の遁世生活を顧みる目などが互に交錯して、複雑な様相を呈してくる。

「大きな柑子の木」は、偶然そこにみいだされたという事実の描写以上の意味を付与されて登場しているとみるが、いかがであろう。

二

「徒然草」第四一段は、五月五日に賀茂の競べ馬を見物に行ったときの筆者の実体験という叙述形式をとる。

棟の木に登って居眠りをする人を群衆が嘲笑しているのを見て、「我等が生死の到来、たゞ今にもあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」と兼好が言ったところ、人々はその通りだと感心して、彼を、よく見物できる前の方へ呼び入れてくれたという。最後を「かほどの理、誰かは思ひよらざらんけれども、折からの、思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず」と結ぶ。

あろう。筆者兼好は柑子をそういった、生活次元における貴重な物品として設定していると思う。

しかし、柑子に関して私の提言したいことは、このことに中心があるのではなく、これをも前提とし、遁世者や僧侶と柑子の結びつきの問題である。

私は以前より、一段のこの閑居に住む遁世者の柑子の実への執着を讀むごとに、「発心集」（巻一の八話）をひもといたとき、強烈な印象を受けた。

六波羅寺の住僧幸仙と云ひける者は、年来道心深かりけるが、橘の木を愛し、いささか彼の執心によりて、くちなはと成って、彼の木の下にぞ住みける。委くは伝にあり。^注

なる、幸仙のイメージを重ねさせてきた。道心が深いにもかかわらず、橘の木に執心を示したため、死後に蛇となつて橘の木の下に住んだという、この凄みのある説話は、一段の、理想的な閑居生活を営む遁世者が柑子に物欲を示した構図と類似する（橘と柑子を同類とみる）。

兼好は「発心集」に目を通した形跡があるので、一段を執筆したとき、この幸仙説話を想起した可能性もなくはない。もっと思いついた臆測をすれば、先の「閨伽棚に菊・紅葉云々」に「源氏物語」の雰囲気を重ねさせたと同じように、体験的叙述の背後にこの説話を意図的に重ねさせていた可能性もあるのではなからうか。

因に、この康仙説話（幸仙は各説話により文字が相違するが、以下は「法華経験記」によって康仙とする）は非常に著名な往生談で、早くは「大日本国法華経験記」上巻三七話「六波羅蜜寺の定読師康仙法師」にみえ、次のように最も詳細である（原文漢文）。

沙門康仙は、六波羅蜜寺の住僧なり。志を仏法に繫けて、勤めて法華を讀み、心に往生を願ひて、身に念仏を修せり。六波羅蜜寺に定読師となりて数十年、南北の智者に對ひて、説法論義を聞けり。妙法の功、身に積みて、聰聞の徳、心に

飽く。況や世間の蓄を捨てて、ことの功徳を勤修し、三業を調順して、六根を懺悔するをや。老後に及びて、惡縁に染まずして、命終を取れり。入滅の已後、靈、人に託きて云はく、我はこの寺に住する定読師康仙なり。年来法を聴聞せしに依て、随分の行業に依りて、當に極樂に生るべし、しかれども、少しきことに依りて蛇の身を受けたり。我存生の時、房の前に橘を殖えけり、年を運たるの間、漸々に生長して、枝葉滋茂し、花を開き葉を結べり。我朝夕に橘を見て、二葉の当初より、果実を結ぶ時まで、治養將護して常に愛翫しけり。念重きにあらざといへども、愛護の執心に由りて、蛇の形と作ることを得て、橘の木の本に住す。我がために妙法華經を書写して、當にこの苦を抜きて、善處に生れしむべしといへり。（これを聞き、橘の木の下を見ると、三尺の蛇がいたので、同心合力して法華を書写開講供養したところ、僧の夢に康仙があらわれ、浄土に生まれたと告げた。夢さめて後、木の下を見ると蛇は死んでいた）。

この話を源泉にした説話は「拾遺往生伝」（巻中の二）や「今昔物語集」（巻十三の四三話）にもある。「発心集」は「拾遺往生伝」に、「今昔物語集」は「大日本国法華経験記」に各々依拠していると思われる。

康仙説話で留意すべき点は、彼が熱心な法華經の読師であり、世間的な蓄積も持っていないこと、それにもかかわらず、ただ橘の実を「治養將護」したため、その執心によって、死後蛇になったことである。各説話集ともにこの「執心」「愛執」を指摘する点で一致する。一段でこの説話を重ねさせてみるのは私だけの独断的な読みであらうか。近代、現代の注釈書類のいくつかにあたってみたが、この説話に言及するものをみいだせなかった。

ところが「野槌」^{注11}には「木実を惜みし類」として、

くだ物をおしむもの世におゝかり、もろし和崎がすもゝはさねをかぞへて鏡をばとり、王安豊がすもゝは人のうへん事をきらひてさねをきりてうる、陸龜蒙が橘は野人にわかつたず、王儉が帳下には柑子たゞれたり、皆これ愛惜するところあれどもいやしからぬにはあらず、日本にも萬壽の比六波羅蜜寺の沙門講仙、庭前に橘をうゑて常に愛し弄びしかば、死して後、蛇となりて橘樹の根をまとひて

おとなふものなし」にある「懸樋の掌」とか「くよりほかにとふものなし」という発想など、西行の和歌は^{注5}、中世の隠者文学における常套表現である。前段のこのような方向を決定付けるのは、清澄な仏道生活と閑居生活を鮮やかにイメージさせる「関伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる」設定が、すでに「盤斎抄」の指摘にあるように、「源氏物語」で源氏が雲林院に参詣したときの、

おしあけ方の月影に、法師はらの関伽^{注6}たてまつるとて、からく^{注7}と鳴らしつゝ、菊・花・濃き薄き紅葉など、折り散らしたるも、はかなれど、この方のいとなみは、この世も、つれづれならず、後の世は頼もしげなり（賢木）

を念頭においていることは、関伽・菊の花・紅葉・折り散らしたる、といった言葉の一致だけでなく、場面からみても確実である。そして、この表現を一段に援用していることは、とりもなおさず兼好の実見した庵室を、よりリアルに描写する方向ではなく、「源氏」を踏まえ、そこに漂っている「はかなげなれど、後の世は頼もしげなり」という雰囲気を重ねて、一種の情緒の増幅重層化を行おうと企図しているのである。換言すれば「関伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる」庵室は、一個の実在としての域を越えて、物語を背景にして、理想的な閑寂生活のシンボルとしての意味をおびてきている。

このように前段が閑寂な庵室生活の理想的イメージを創造せんとしたのに対し、後段はそれから「少しことさめて」ゆく、現実の生活次元にひきもどしたものと見える。このあたりの関係を伊藤博之氏は、前半の景物が閑居生活のシンボルとすれば、「あなたの庭」は「経済生活の現実性のシンボル」であると説かれる。^{注8}

この段を先のような観点から眺めて、大いに気になってくるのは「枝もたわむになりたる」「大きな柑子の木」の存在とその意味である。一応、体験談とみたとき、この「大きな柑子の木」は、偶然そこにあったのか、他の果実の木だったのを柑子に変えたのか、あるいは実在しないも

のを虚構したのか、種々に考えられるが、現時点ではこれを確証付けることは、ほとんど不可能である。ただ考えられるのは、実際に柑子があったにしろ、なかったにしろ、この一文に形象化されたとき、柑子の木は単なる偶然でくわしたものでなく、筆者にとっては、ある意味を付与されて登場しているのではないかということである。その柑子は庵主にとって、また当時の人々にとっても、大いに貴重なものであるという仕立てが「大きな」とか「枝もたわむになりたる」「まはりをきびしく圍ひたりし」などの叙述で明らかに匂っている。

最もこの柑子が現在のなににあたるかに関しては諸説があり、定説をみない。現代の注釈書では「いまの蜜柑」であるとするのが多いが、『徒然草諸注集成』の整理によると、

A 説Ⅱ昔の橘が今の蜜柑。

B 説Ⅱ昔の橘が今の柑子。

C 説Ⅱ柑子も今の蜜柑に同じ。

などに分かれているが「松屋筆記」などは「橘は蜜柑なる事知るべし。蜜柑を柑子ともいへり」とする。

私は、いま、この柑子の実の植物学的実体を追求する力量も興味も持ちあわせていない。ただ、兼好をも含め、当代の人は柑子を蜜柑・橘と同じ柑橘類と認識していたであろうこと、さらに「古事記」や「万葉集」にでる橘が当時の柑子か蜜柑か、あるいは別種のものかと問いつめれば、当時でも人によって曖昧さがあったのではないかと考えるだけである。

兼好がここで柑子を設定したとき、それは大へん貴重な物品として出されていたろう。伊藤博之氏は、柑子に関する文献を調査され

「これは偶然にあったからというよりも、柑子の実というのは、当時の農産物商品の中では比較的有力なもので市場流通商品だった」^{注9}「丹波の栗、近江の柿とならんで商品価値を持った」ものだとされる。この柑子が、あまり金にもならない山桃や椎の実などの他の実であっては具合が悪いで

「徒然草」の草木をめぐって（下）

稲 田 利 徳

はじめに

前編においては、「徒然草」一三九段の「家にありたき木は」の段を中心に、「枕草子」「玉勝間」との比較を通して、兼好の草木嗜好に触れてきた。この後編では「徒然草」の諸段に表われる草木のいくつかをとりあげ、各々の草木が、章段の構想のなかで、どんな意味を与えられているか、試見を述べたい。

その際、特に問題となるのは、単に「木や草」などと漠然と表記されたものでなく、具体的な草木の種類を明示したものである。一三九段のほかに「徒然草」では、どんな種類の草木があるのか、少し思い浮べてゆくと、柑子の木（一一一段）、棟の木（四一段）、榎の木（四五段）、くちなし（八七段）、めなもみ草（九六段）、桂の木（一〇四段）、杉・椎柴・白樫（一三七段）、呉竹・河竹（二〇〇段）などをはじめ、他にもいくつかの草木が散見される。が、構想とかかわるもので重要なのは、説話的、物語的な章段のもので、そのうちで、ここでは、柑子の木、棟の木、くちなし、桂の木の四種を検討する。

なお、この論の基底には、先に公表した「徒然草」の虚構性^{注1}で示した考えが流れているので、あわせて参照願えれば幸甚である。

〈後 編〉

一

「徒然草」第一一段は周知の段であるが、考察の都合上、一応、本文を引用しておく。^{注2}

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心細くすみなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ懸樋の雫ならでは、露おとなふものなし。關伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがにすむ人のあればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

この段は筆者の体験談の叙述スタイルをとり、かなり克明な描写が行われているが、取り扱いには注意を要する。

橘純一氏のように、この段の表現内容があまりに技巧的で真実味がないのを根拠に架空談ではないかとされる研究者がある一方、安良岡康作氏のように「大徳寺文書」と関連付け、この「ある山里」を^{注3}通世後の生活を支えた山科小野庄とされ、正和二年秋のころの体験談とまで推測された研究者もいる。私はこの第一一段が全くの架空談とは考えず、これに類似の見聞体験があったとみるものだが、ただ、この庵室の描写などには、かなりの粉飾が施されていると予測される。

この第一一段は「かくてもあられるよ」で大きく二段に分けられるが、前段は作者のみつけた庵室の閑寂、簡素さを、実在したもの以上に、より強調したい執筆心理が虚構描写をよびよせている。「遙かなる苔の細道」という兼好好みの設定といい、「木の葉に埋もるゝ懸樋の雫ならでは、露